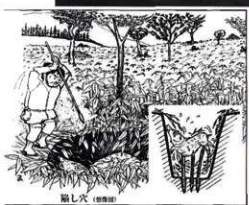
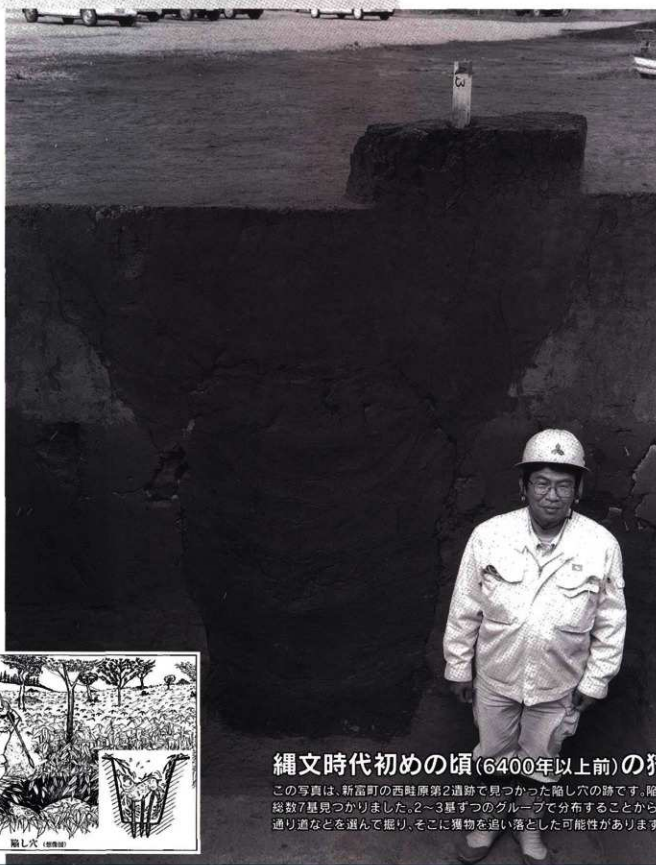


発行日 平成16年2月20日
発行 宮崎県埋蔵文化財センター
本館 〒880-0212 宮崎県佐土原町下那珂4019番地
神宮分館 〒880-0053 宮崎市神宮2丁目4-4



縄文時代初めの頃(6400年以上前)の狩猟

この写真は、新富町の西畦原第2遺跡で見つかった陥し穴の跡です。陥し穴は総数7基見つかりました。2~3基ずつのグループで分布することから動物の通り道などを選んで掘り、そこに獲物を追い落とした可能性があります。

場を使い分けていた旧石器時代

【旧石器時代:約12000年以上前】

焼けた礫のまとまり(礫群)が集中している場、石器のかけらやハンマー、敲石が集中している場、皮をなめすのに使われたと考えられる石器がまとまって分布する場が見つかっています。このことから、それぞれ「火を使う場」「石器製作の場」「作業の場」など、場を使い分けていることがわかってきました。旧石器時代のくらしが見えてきました。



出土した石器 (高鍋町 牧内第1遺跡)

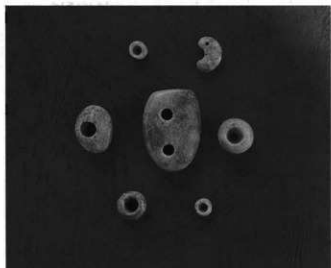


牧内第1遺跡の遺構検出状況 (石器製作の場)

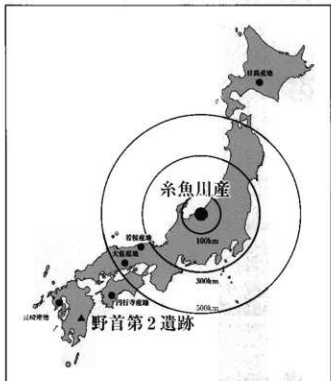
縄文時代に北陸と交易!?

【縄文時代:約12000年前～2500年前】

翡翠の石製品が発見されました。翡翠は板ガラスやナイフの刃よりも硬いのですが、穴をあけて垂飾りにしたようです。どうやって穴をあけたのでしょうか。さらに驚くことに、翡翠の材質や製品の形から「糸魚川産」(新潟県)の可能性が指摘されています。宮崎から直線距離にして約800km。宮崎までどうやって運んできたのでしょうか。



翡翠の石製品 (高鍋町 野首第2遺跡)



翡翠産地と野首第2遺跡

時代とともに変化する埋葬形態（弥生～近世の墓制）

【弥生～古墳時代：約 2500～1300 年前】

弥生時代から古墳時代には、特定の個人が手厚く埋葬されることが顕著になります。

西都原古墳群は、その代表例です。

また現在、調査中の高鍋町の野首第1遺跡には、横穴式石室をもつ野首1号墳(写真①)、野首2号墳があります。遺体を納める石室は、大きな丸石で組まれています。この時代までの、埋葬は土葬が一般的です。

【古代：約 1300～800 年前】

古代になると、県内では火葬が行われるようになります。高鍋町の老瀬坂上遺跡では、須恵器短頸壺を骨蔵器とする火葬墓が見つかっています。(写真②)現代のように、火葬した骨を壺の中に納めていたようです。

中央(奈良、京都)では、仏教思想の浸透とともに、火葬が開始されており、県内の火葬の始まりも、仏教思想の地方への広まりとの関連が想像されます。

【中世：約 800～400 年前】

中世初期にいったん行われなくなったと思われる火葬は、13～14世紀にかけて再び盛んになります。佐土原町の平田迫遺跡では、その時期の骨蔵器が出土しています。

また、中世の墓は、川南町の前ノ田村上第1遺跡でも見つっていますが、こちらは土葬の墓です。(写真③)。また、遺体と一緒に、墓に銭(六道銭)を埋めるようになるのも中世からです。

【近世：約 400～130 年前】

この時代の墓は、ほとんどが土葬であったと考えられています。川南町の銀座第1遺跡では、土葬の墓(土壙墓)が14基検出されており(写真④)、そのうち7基から銭(六道銭)が出土しています。

銭種は「寛永通宝」がほとんどで、1枚だけ納めている墓もあれば、3枚から7枚の複数枚を納めた墓もあります。この後、明治になると再び火葬が増えていきます。



写真①：横穴式石室（高鍋町 野首1号墳）



写真③：土壙墓（川南町 前ノ田村上第1遺跡）



写真②：骨蔵器（高鍋町 老瀬坂上遺跡）



写真④：土壙墓（川南町 銀座第1遺跡）

